

# NCC宣教会議・2005年宣教宣言 (2005年11月24日～26日)

「いのちの共感からキリストの平和へ - 日本の敗戦60年における祈りと行動による連帯」  
「わたしは平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。」(ヨハネによる福音書 14:27)

1998年のNCC宣教会議から7年が経過した今年、わたしたちは、日本の敗戦60年を覚えて、NCC宣教会議を開催しました。この7年の間、「9・11」が起こり、アフガニスタン、イラクへの「対テロ戦争」が起こされ、自衛隊がイラクに派兵されました。わたしたちが、戦争を止めることができなかったという事実をまず確認しなければなりません。また、国内においては、「日の丸・君が代」の強制徹底化、改憲、教育基本法改悪への動きが起こっています。

今回の宣教会議では、安載雄さん(前アジア・キリスト教協議会総幹事)より「エキュメニカル運動と宣教」、饒平名長秀牧師(沖縄キリスト教協議会副議長)より「沖縄からみた『戦後60年』と宣教課題」、平良夏芽牧師(辺野古の現場から)より「暴力との闘い - もう加害者にならない為に - 沖縄・辺野古から」の講演と、平良愛香牧師(こども平和会議ディレクター)より、今年8月に開かれた「子ども平和会議」の報告を聴きました。また、パネルディスカッション、グループディスカッションを通して、それぞれの現場からのわかちあい、教団・団体の宣教課題のわかちあいをしました。そしてその中で気づかされてきた課題と、今後のNCCの方向性、将来への展望について考え、祈るときをもちました。

わたしたちは、1998年に出された「NCC宣教宣言」の重要性を再確認します。わたしたちは、この1998年「NCC宣教宣言」において「命の痛み」に共感することこそが、宣教の原点であることを確認しました。しかし同時に、軍事占領が現在も続いている沖縄の痛みへの認識を欠いていたことの重みを受け止めていきたいと思います。わたしたちは、阿波根昌鴻さん\*の非暴力のたたかいを継承している辺野古に連なって、歩んでいきたいと考えます。わたしたちは、暴力とのたたかいに参加します。わたしたちは平和をつくり出すことに参加します。十字架のイエス・キリストに聴き従い、共生を阻害するさまざまな障壁を打ち破ることは、わたしたちの宣教の課題です。

\*

今、わたしたちは以下の3点を緊急に取り組むべき課題とします。

## 1 辺野古

現在進められている米軍再編成はアジアにおける米国の覇権を拡大するための刷新・強化を目的としています。日本政府は、第二次大戦敗戦時、サンフランシスコ条約締結時、施政権返還時に続き、今再び「日本の平和」の代価を沖縄に払わせることを明言し、沖縄の声を全く無視して、沖縄に新たな米軍基地の建設を進めようとしています。この米軍基地は朝鮮半島、インドシナ半島、フィリピン、アフガニスタン、イラクなどで民衆を虐殺した軍隊を送り出してきました。米軍基地はアジアの隣人たちに突きつける剣です。これ以上、加害者とならないために、辺野古などでの新基地建設を阻み、今ある基地をなくす

---

\* 沖縄・伊江島で米軍に奪われた土地を取り戻すために、聖書に基づいて完全非暴力でたたかい続けた。

ことは緊急の課題です。

## 2 憲法

現在、非戦・非暴力の原理としてきわめて重要な前文と第9条をもつ日本国憲法を「改憲」の名目で廃棄し、新憲法を作る動きが強まっています。「本土」にとっての「戦後」も在日米軍基地の75%を押し付けられ、戦争状態の続く沖縄が、実質的に憲法を限定的にしか適用されてこなかったことも事実です。私たちは、これ以上、戦争を許さず、戦争協力をせず、諸外国の隣人たちに対する加害者とならないとの決意をもって宣言し、沖縄からも「本土」からも戦争行為をさせないために、憲法を変えさせず、むしろ憲法を実現するために働きます。

## 3 平和教育（教育～共育へ）

教育現場における「日の丸・君が代」強制、歴史歪曲教科書問題、「心のノート」使用強制、性教育・ジェンダーフリー教育バッシング、少年法改悪、教育基本法改悪など、子ども・青年を国家に従順な人間に育てるための動きが勢いを増しています。そういう動きが子どもを自己否定や暴力に追いやっています。踏みにじられたいのちの痛みを共感し、自らの生き方を問い直す共生のための平和教育に取り組んでいくことは緊急の課題です。子ども・青年と共に「平和を実現する人」へと育っていきましょう。

\*

わたしたちは、日本国家による植民地支配と軍事侵略に加担した罪のゆるしをアジアの隣人たちに請い、正義と信頼を土台にした平和をつくろうとつとめてきました。しかし、日本政府は、米国の力による支配の一端を積極的に担い、また靖国神社参拝、歴史歪曲教科書に示されるように独善的な国家主義を強めており、その結果、近隣アジア諸国との関係はこれまでになく悪化しています。覇権主義による北東アジアの分断は教会間関係にも影を落としています。共に平和を作り出す器として働くために、民衆と民衆の出会いを通じた東アジアの諸教会間の関係構築が課題です。

全国には数多くの教会・教団・キリスト教団体があり、エキュメニカルな交わりを持ちつつ、それぞれの宣教課題と取り組んでいます。それらを分かち合い、互いに尊敬を持って協力し合っていくことは重要な課題です。キリスト者のあいだの和解と一致、対話と協働を通して、この世への「平和の使者」となることをめざします。また、「いのちの痛み」への共感に立った諸宗教との対話・共働をすすめます。

今日、このような時代・状況の中にあって、エキュメニカル運動は、ますます、その重要性を強めていると信じます。わたしたちは、エキュメニカルな交わりを深めつつ、他者の痛みを共に負われたイエス・キリストに従う道を歩みます。

「わたしは平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える」と約束されたイエス・キリストは、続けて言われました。「心を騒がせるな。おびえるな」と。

そうです。わたしたちは「世の支配者」を恐れません。イエスと共にいてくださった愛と平和の神が、わたしたちと共にいてくださるからです。わたしたちはイエスの促しに従います。「さあ、立て。ここから出かけよう。」(ヨハネ14:15-31)

(添付：「アクションプラン - 行動の提案」)